おにぎり通信

2021年11月13日（土曜）　四ツ谷おにぎり仲間

こんにちは！私たちは毎週土曜日に、四ツ谷、銀座、日比谷、秋葉原、日本橋、東京駅周辺で生活されている方々を訪問しているボランティアグループです。

今日は「茨城県民の日」です。1871(明治4)年11月13日に初めて「茨城県」という呼び名が使われました。「茨城」という名は、その地で悪さをしていた族を、茨を使い、茨の城を築いて退治したことが由来とされています。この話は、約1300年前の奈良時代に作られた「常陸国風土記」に書かれています。常陸国は、今の茨城県です。風土記によると、常陸国は、農耕が盛んで、山の幸海の幸の宝庫であり、人々は心満ち足り、家々は豊かとあります。男女は、春の花咲く頃や、秋の木の葉が色付く頃に、互いに手を取り合い、飲み物食べ物を持って、筑波山に遊び楽しんでいたそうです。天上にある理想郷とはこの地のことではないか、とまで書かれています。

茨城県は、今年の都道府県の魅力度調査ランキングで47位と最下位でした。その魅力が上手く伝わっていないのかもしれません。

福祉行動を希望の方は、
おにぎりを配る時に、お声がけください。

病院や生活相談等で、福祉事務所に行くことを希望される方は、おにぎりをお渡しに伺った際に声がけ下さい。毎週土曜日の訪問活動の時にお声がけ頂いた場合、翌週以降に福祉事務所まで同行します。

中央区福祉事務所・・中央区築地1-1-1　中央区役所4階

千代田区福祉事務所・・千代田区九段南1-2-1　千代田区役所3階

四ツ谷おにぎり仲間　千代田区麹町6-5-1　聖イグナチオ教会

連絡先　080-7967-8672（連絡可能時間　毎週土曜日午後３時～６時）

【石垣りん】

女性詩人・石垣りんは、20代前半に戦争を経験し、戦後、本格的に詩を作ります。戦争に怒り、平和を願い、最初は、国や社会について、正義感にあふれる詩を書きますが、だんだんと詩の主題が、日常、家族、自分と、狭く、しかし深くなっていきます。下にある２つの詩は、どちらも自らを描いたものですが、１つめの30歳頃の詩に比べ、20年を経て、50歳近くで父親を亡くした時に作られた２つめの詩は、欲に引きずられながらも懸命に生きる人間の業を抉り、凄味を感じます。

「三十の抄」

牛蒡はサクサクと身をそぎ　水にひたってあくを落とす　ほうれん草は茹でこぼされ　あさりは刃物にふれて砂を吐く　私はどうすれば良い　ひたひたと涙にぬらし　笑いにふきこぼし　戦火をくぐらせ人の真情に焙って三十年　万人美しく、素直に生きるを　このアクの強さ　己がみにくさを抜くすべを知らず　三十年　俗に「食えぬ」という　まことに食えぬ人間　この不味きいのちひとつ　ひとにすすむべくもなき　いのちひとつ　齢三十とあれば　くるしみも三十悲しみも三十　しかもなおその甲斐もなく　世に愚かなれば　心ますしければ　魂は身を焦がして　滅ぼさんばかりの三十。

「くらし」

食わずには生きてゆけない。　メシを　野菜を　肉を　空気を　光を水を　親を　きょうだいを　師を　金もこころも　食わずには生きてこれなかった。　ふくれた腹をかかえ　口をぬぐえば　台所に散らばっている　にんじんのしっぽ　鳥の骨　父のはらわた　四十の日暮れ私の目にはじめてあふれる獣の涙。

おにぎりを包むラップや読み終わった通信は、放置せずゴミ箱へ

おにぎりは、お１人１個で、その日のうちに召し上り下さい